「迫害する者を祝福する」

ローマ１２：１２－１４

堀田修一　２４・７・１４

Ⅰ「望みを抱いて喜び、苦難に耐え、ひたすら祈りなさい」：１２

１.「望みを抱いて喜び」：１２。神は、この地上で私たちが、どんなに苦しい時も決して私たちを見捨てられない愛の望み、主が再臨される時、罪、苦しみ、痛みのない栄光のからだ（栄化）、救いを完成される望みを抱いて私たちは喜ぶことが出来ます。

２.「苦難に耐え」。あるグループの教え（自分たちこそ聖書に忠実と語る）は、キリスト者は、苦難の前に携挙、主の空中再臨（この教えそのものが違う。空中再臨と地上再臨の２回あるという解釈。いつかその間違いを説き明かします）があり、主の再臨の前の苦難には合わないと教える。それは、明確に聖書的ではない。聖書は苦難を正直に語っている＝「そうした苦難の日々の後…人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです」（マタイ２４：２９－３０）。「あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました」（ヨハネ１６：３３）。「苦難さえも喜んでいます。それは苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望（再臨の主を待ち望む希望）を生み出す」（ローマ５：３，４）。「あなたがたも多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちに、そして主に倣う者になりました。…あなたがたがどのように…神に仕えるようになり、御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです」（Ⅰテサロニケ１：６、９，１０）。「私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます。というのは、私が弱い時こそ、私は強いからです（私たちが苦難の中で弱さを認める時こそ、力強い主が私たちを十分な恵みと力で支えて下さるからです）」（Ⅱコリント１２：１０）。主は苦難の中で私たちと共にいて下さり、耐える力を下さる。

３.「ひたすら祈りなさい」。私たちは、順調な時ばかりなら、だんだん真剣に祈らなくなる。しかし、苦難があると、自分の弱さが分かり霊的な目が覚め、神に頼るしかないと心が正され、ひたすら神に祈る者とされます。ひたすら祈る時に、神と深く交わり、神の恵み、愛、力を深く知る者とされます。これが「神はすべて（苦難を含む）を益（神に近づく、神にひたすら祈り神に頼る益）としてくださる（ローマ８：２８）」の深い意味です。

Ⅱ「聖徒たちの必要をともに満たし、努めて人をもてなしなさい」：１３。

１．お互いの必要をともに満たすためには、一人一人が、何を必要としているかを識別出来るように祈ることです。神の下さる愛は、一人一人の真の必要を識別する愛です。真の必要を見分けず一方的に何でもかんでもやってあげ過ぎるのは真の愛ではない。また相手の真の必要が分かり何の手も差し伸べないのも真の愛ではない。祈りましょう。「お互いに真の必要は何かを識別して愛をもって助け合うことが出来るように」。「あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、大切なこと（真の必要）を見分けることができますよ

うに」（ピリピ１：９，１０）。神は私たちの真の必要を知っておられる＝「あなたがたにこれらのものがすべて必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます」（マタイ６：３２）。

２.「努めてもてなしなさい」。当時は、巡回伝道者や貧しい人をもてなす必要があった。現代に適用すれば、助けを必要としている人をもてなし、地震等で家を無くした人々を自分にできる分で支援をしたい。

Ⅲ「あなたがたを迫害する者たちを祝福しなさい。祝福すべきであって、呪ってはいけません」：１４。

１．このみことばは、私たち人間の愛では、実行不可能なみことばです。自分を攻撃する人を赦すのも難しい上に、祝福することは、人間の愛では不可能です。このようなみことばと向き合う時に非常に有効なのは、まず、神なんか必要ないと高ぶる罪深い私たち人間に、父なる神、子なる神は、どのように愛をまず示してくださっているかを知ることです。父なる神の愛＝「父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない人にも雨を降らせてくださる」（マタイ５：４５）。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世（神に背く人間、私たち罪人）を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのち（永遠に神と交われるいのち）を持つためである」（ヨハネ３：１６）。「互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。神も、キリストにおいてあなたがたを赦してくださったのです」（エペソ４：３２）。御子イエスの愛＝「父よ、彼ら（罪人の全人類、私たちを含む）をお赦しください。彼らは、自分が何をしているかが分かっていないのです」（ルカ２３：３４）。私たちは、自分の力で人を赦そう、祝福しようと頑張るのではなく、まず、自分の罪ゆえに滅んで当然の自分を愛し救って下さった神の愛、御子の愛を静かに思い巡らし、感謝し、感動し、神の愛、キリストの愛にとどまり続けたい。主の愛に感謝し、自分を迫害する人を赦せるように祈る。その人に神の祝福（自分の罪を認め主を信じ真の救い）があるように祈る。祝福すべきであって、呪ってはいけない（迫害者を憎み呪い、滅びを祈ってはいけない）。自分も、自分の罪の故に神の呪い（正しいさばき）を受け神に滅ぼされても当然でしたが、主が私たちの身代わりに神の呪い、私たちの罪の刑罰を受け、真の救いという祝福を下さったのですから！※証し：人生で神の愛で非難する人を赦し、祝福し、神が私を祝福される心と人生。

２.「愛すること」と、「好きになること」の違いを理解できるように祈りたい。主は「敵を愛しなさい」と語られたが、「敵を好きになれ」とは語られていない。「すべての人を好きになれ」とのみことばはない。「隣人を愛しなさい」と語られている。隣人を好きになるかは、それぞれの好み、相性により左右される。「好き」は感情の領域。「愛する」は、意志の領域。ある人を好きになれないと気づいても、くよくよする必要はない。神は、お互いの好みの人だけの集まりの教会を形成されない。好みではない違うタイプの人が互いに愛し合い、赦し合う教会を世界中で建て上げておられる。好みでない合わない人にも神の愛で愛する社会生活。神は、私たちが感情的に好きではない人、なかなか考え方の傾向が合わない人も、神が罪人の自分を愛されたように、自分が好きになれない人、自分を攻撃する人をも、神からの意志で愛することを可能にしてくださる→「こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った。『主イエスよ、私の霊をお受けください。』そして、ひざまずいて大声で叫んだ。『主よ、この罪を彼らに負わせないでください。』こう言って、彼は眠りについた」使徒６：５９，６０。※証し。

３．赦すことと法的な処置について理解しておくことも大切です。私たちが、法的な被害（不貞、暴力、盗み等）を受けた時に、正式な裁判を依頼することは、相手を赦すことと矛盾するのでしょうか。いいえ。次のみことばが答えです＝「彼（神が立てられた法的な権威、秩序）はあなたに益を与えるための、神のしもべなのです。しかし、もしあなたがたが悪を行うなら、（裁きを）恐れなければなりません。彼（法的な権威）は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼（法的な秩序）は神のしもべであって、悪を行う人には怒りをもって報います（自分で蒔いた悪の刈り取りを正しく行なわせる→ガラテヤ６：７）」ローマ１３：４。キリスト者は祈りつつ相手を赦しながら、相手が法的な悪、罪を正しく反省し、神に立ち返るという祝福を得るために、正式な裁判に臨むのです。

祈り：望み、喜び、忍耐、必要への識別力、人を赦し祝福を祈る愛をお与え下さい。応答の賛美、聖歌 118「神の賜う愛」をもって神を賛美しましょう。